青森県立郷土館研究紀要 第40号，89-148，2016．3

青森県下北地方におけるサルケ（泥炭）の利用

増田公寧[1)]

Field studies on usage of peat in Shimokita district, Aomori prefecture, Japan.

Kimiyasu MASUTA

Key Words：泥炭,客土(土地改良),開拓,藤田千吾

はじめに

筆者は昨年度、青森県津軽地方における庶民によるサルケ（泥炭）[2)]の利用について調査し、報告した[3)]。本稿はその続編であり、同県下北地方を対象としたものである。

この地域の泥炭地の資源的な価値とその利用については、資源科学研究所による調査によって、科学的な分析にもとづく詳細なデータと、農業振興のための土地改良にむけた指針が示されている[4)]。また、この地域の泥炭には「地下資源としての価値は全くない」との評価もある[5)]。

いっぽうで、庶民とサルケ（泥炭）の関係について記したものはすくない。抜すいして以下に掲げる。

「苫部平と呼ばれていた田作地を歩いていたらば、路傍に猿毛が積んである。採って見ると北海道でいう泥炭で、葦類の茎や根の累積であった。」[6)]

「明治末のころ、田名部の大曲・金曲に津軽から入植者たちが入り、表土層の泥炭土をはがし、そのあとに水田を作ったら三俵半から四俵の反収をあげ、大正年間にいたって五俵の反収をあげる農家も出た。」[7)]

「燃料の不自由なときには、泥炭層を長方形に切り取り、水田のあぜ道に積んで乾燥させ、冬期間の暖房用燃料として使用したこともあった。」[8)]

「昔、田名部まで３里の道を歩いて買物に行ったが、途中、金曲部落の所で四角に切った土の塊を干してあるのをよく見かけた。聞いてみたら薪にするのだというから、土を燃やすのかと驚いたという。金曲部落は津軽から来た人たちが入植したところだというから、この土の塊がサルケ（泥炭）のことのようである（大正６年生まれ、女性）。」[9)]。

「大曲地区は一面のカヤ野で、人の背を越すカヤの密生地であった。またカヤ野の下は泥炭（サルケ）になっており強烈なにおいがして体までしみこんだ、それを取り除き乾かして燃料にした。」[10)]

「水田を整備するために『サルケ』と呼ばれる泥炭を取り除く作業も大変でした。土は現在の酪農の山から人力で運び、家族総出の作業であったと記憶しています」「サルケはよく乾燥して燃料にしました。サルケの匂いが身体に染み込んでいるためか、学校へ行くと『臭い、臭い、津軽衆』とよく馬鹿にされたものでした。」[11)]

筆者は、これらの記述を手がかりとして、これまであまり知られることのなかった、下北地方における庶民とサルケ（泥炭）とのかかわりについて聞き取り調査をおこなった。本稿は、その記録と考察である。なお、この調査は博物館としての調査ではなく、私的におこなったものである（調査日：2015年5月5日～6日,8月20日～21日,9月22日～24日,2016年1月30日）。

１．調査地について

下北半島でもっとも広い沖積低地であるむつ低地（田名部低地）にみられる泥炭地は、田名部川下流域の自然堤防堆積物と洪積台地との間、あるいは陸奥湾内の沿岸流や潮流によって南方の砂質堆積物が運ばれて形成された砂州の後背湿地によく発達している（図１，Ａ）。また、砂州の堆積と同時期かそれ以降にできた堤間湿地に成った泥炭層もみられる（図１，Ｂ）。泥炭地は、むつ市大曲、同金曲、同田名部品ノ木、同土手内、同最花などに分布している[12)]。昭和30年頃のこの地域内の水田920町歩のうち、いわゆる「サルケ田」「シクボ田」といわれる湿田220町歩、半湿田560町歩が大部分（約85％）を占め、乾田は140町歩しかなった[13)]。同じ時代の南津軽郡の水田の８割はすでに乾田化されていた[14)]状況に比べれば、昭和の中頃でもこの地域はまだ土地改良の途上にあった。

本稿では、上記に該当する地域のうち、南から、むつ市大曲（おおまがり）、同金曲（かなまがり）、同大字田名部字土手内（どてうち）の３地区を調査の対象とした（図１）。

1）青森県立郷土館研究員　青森市本町二丁目8-14

大曲地区は、弘前の藤田千吾（ふじたせんご）らによって明治30年代に開拓された地域である。藤田千吾は、万延元（1860）年４月19日に弘前藩士藤田千次郎の長男として笹森町（弘前）に生まれた。祖父の藤田百世（ももよ）は弘前藩の勘定奉行を務め、千貫崎から下車力、下繁田付近に至る、岩木川と山田川に挟まれた地域の開発と、新堰（鶴田町木筒から車力村豊富までの用水堰、約28km）の開鑿に関わった人物であった[15]。その影響もあってか開拓に志を抱き、新堰の水下に、それまで土渕堰水下であったいくつかの集落が編入されることにより起きた水不足を解消するため、明治13年、私財を投じて稲垣村豊川で岩木川留切の工事をおこなった。明治28年から青森県議会議員として２期をつとめたのち、明治30年に大曲の開発に着手し、翌31年、工藤豊太郎、金沢吉郎、工藤勘九郎、工藤男治（以上西津軽郡車力村）、工藤兼吉（同木造町川除）ら有志とともに大曲に移住して開拓に乗り出した。下北の開拓を志した動機について、孫の藤田静六氏は「県会で下北開発の委員をしていて知事と意見を異にし、西郡車力村の新田開発に私財を投じ、岩木川留切の難事業を完成した後でもあり、事情の入りくんだ難しい下北の開拓こそ自分の使命と信じ、車力村の全財産を処分してここに骨を埋めようと決めたのでしょう」と振り返っている[16]。また、同期の県会議員であり、下北の近川を開拓した佐々木弘造との出会いも、あえて大曲という下北の地を選んだ直接の動機につながったようである。県下でもとりわけ稲作の難しい土地柄であったが、入植から６年目の明治37年にしてようやく、米の収穫を得たという。下北の米作りの歴史は、大曲・金曲などの南通りでの成功が刺激となって普及していったといわれる[17]。苦労して開かれた水田ではあったが、昭和40年代後半以降「減反・転作の農政以後は兼業農家が増加し」「市内に自家栽培の野菜を直売する状況」[18]となった。当時は、毎月１と６の付く日に開催される市で蔬菜を売る露天商の殆どが、大曲の主婦であったという[19]。現在ではかつての稲作地の多くが畑地や牧草地、あるいは耕作放棄地に転じている。蔬菜の露地・ハウス栽培は依然として盛んである。（調査では、明治31年に藤田千吾とともに入植した一人である工藤兼吉家の子孫からも話を伺うことができた。）

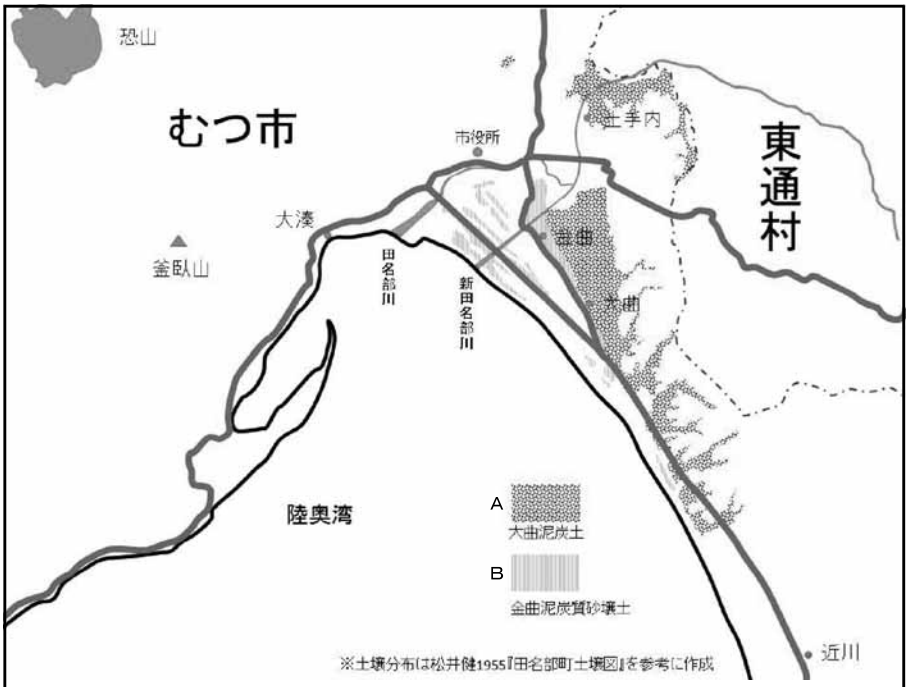

図1　土壌分布は、旧田名部町域内、営農上問題となる表層の泥炭質土壌のみを示す.（松井1955）

藤田千吾の墓（大曲）

金曲地区は、南津軽郡馬場尻村の佐藤茂吉が、斉藤多吉ら有志とともに明治30年代に入植し、開墾したところである。その後、南津軽郡田舎館村大根子の藤林清七郎が、近川の佐々木弘造のもとで蔬菜とりんごの栽培に従事しながら金曲地区の一部を佐藤茂吉から譲渡されて開墾するなど、徐々に入植者が加わり発展した地域である[20]。筆者は新田名部川の南側（金曲２～３丁目）を調査の対象とした。（調査では、藤林清七郎の子孫からも話を伺うことができた。）

金曲地区

土手内地区は、市の中心部の東側、田名部川沿いの自然堤防上にある。後背湿地に泥炭が発達しており、川が運んだ土砂により分解して黒泥に変わっているところも

みられる[21]。当地は明治30年頃に、津軽地方からの入植により開拓された[22]。地域内には、戦時中、泥炭の乾燥に使用されていた場所があり、そこは昭和28年に開田された。泥炭土の上に30㎝もの盛り土がしてあるため、たまたま覆土法と同様の客土の役目を果たし、混土法がおこなわれている周囲の田より収量が良かったという[23]。場所は土手内集落の北東である[24]。

土手内地区遠望（手前は田名部川）

２．調査の記録

①　むつ市金曲　Ａ氏　大正12年生　男性

居住の経緯　南津軽郡田舎館村から近川に入植した先祖が、金曲の土地を譲り受けて開拓に従事した[25]。

呼称　サルケと称した。

分布・質　サルケの質の違いについては、水路を目安として、質の善し悪しとその分布を認識していた。ただし、サルケの質の違いをあらわす呼称の別はなかった。

「うーん、３線、４線……ああ、４線の下だな。４線がら下のほだ。（３線より上のほうは、データンがなかったというより、）データンても質が悪くてな。データンてしゃべらいねんだ。まじて（土混じりで）。火つけでも燃いるわげでねしな。燃すのが目的だどごで燃えねんだばだめだんだ。そしておごしたんだ。してかわがして。」

採取時期・場所・主体　「だから春は忙しいんだ。たいした。」というように、サルケの採取は春におこなった。「サルケ切り」「サルケ採り」と称して、家族全員が従事する一大イベントであった。「てづだわねば、あれだもの。田植え来るもんだどごで。うっかりしていられねんだしてな。これかたづげねうぢは。一家総出だ。」

採取目的　サルケを採取する第一の目的は、田の高低をなくすためであったという。Ａ氏は「データンを目的にするんでなぐ、田にするために（とった）。」という。高低の差は場所によって異なるため、掘り採る深さは一定ではなかった。「こごではな、田んぼの土地の人が、サルケを採って乾がして焚いでるのは、みな焚いでるんだ。大抵。それを、新田は旧田よりもたがいわげだんだ。だ（がら）、なんだかだ下がってるとそうなれば、田にさいねわげだ。それでサルケを採って乾がして燃やしたもんだんだ。そごの前のうぢだっきゃ年中燃やしたもんだんだけどもな。」「こごの場合だばよ、なんてーがなあ、ちょっと面倒だんだど。あれとるに。デンヅ（田地）は平野がこうあるで、これがら１シャグだら１シャグを取ったものを、田が一シャグ低いと、せばそれ１シャグのあの、デンツ（田地）を、それサルケを採ねばこれ下ど同じになねべ。そのために１シャグのを採んだ。その場所によっては、５寸でツヂのウスイメど同じになる場合もあるし、その土地にもあるがら、決まってねんだよ。」「それがなあ、田んぼにするために、前の田んぼさ水面が合わるようにするために、その深さが違うんだね。（水平であれば、サルケがまだ残っていても）サルケのごすよ。水が水平になればいい。田んぼを水平にするために採ったもんだ。」「田地、新しい原野がなければ起ごせねんだ。自分で造ってる田がら起ごせばひぐぐなってしまうがらな。田づの水平でねばだめだがら。新しい原野持ってる人はでぎるんだ。だがら此の辺あっちのほう原野いっぺあったがら、たいした起ごしたもんだね。」「これがなあ、専門にみなそうやってるウヂねんだね。アラヂというデンチ（田地）があって、それを田にするためには、サルケを採ねばわがねがら、それを採って燃やしてしたんだ。そいうのがいぢばん、多いんだね。」

つまり、サルケの採取は第一に、田の高さを均一にするための方策であり、新しい原野や田の高低の調整が必要な場合にのみ必要であり、また可能でもあった。

第二の目的は、暖房に利用するためであった。Ａ氏は、利用の目的を「あだるためだ」「燃すのが目的だ」とも語る。サルケの質は場所によって異なり、サルケの「強い」場所から採掘したものは、炭のような持続力があった。「あだるためだ。サルケはな、場所によって、強いどごもあれば、ようぇどごろもあるんだ。だがら、つえどごだば、ああいった燃やしたの、何てすだ、炭みたいになって、それまだ暖房の容器みたいのさ入れで、こたつみたいな入れだ人もあるし、燃やせば、しっかり燃えねうぢに、白くなってあの土入ってくるのもあるどごでな。さまざまなんだそれは。」

採取法　採掘の道具として、タヂとトガを用いた。まず、タヂで切れ目をつけた。トガの幅はおよそ７～８寸程度であったとも、26㎝×30㎝程度であったともいい、サルケを採掘する幅に合わせて作られたものを用いた。次頁の写真はＡ氏が現在も使っているトガ（刃渡り15.5センチ、長さ18センチ、サルケの採掘用ではない）である。「トガって

トガ

ちょうど採れば、７寸とが８寸とが、ちょんどあれ、採るよにこへでるもんだんだ。だいたいこのぐれの幅のやづがな。ひとつこったおっきいのがら、これぐれの幅の３つ採れる。だいたい、７寸。まあ、７寸×７寸でもいいよ、ちょっと長いけどもな。それを厚さ、なんぼだべなー。いっしゃぐにせば３寸……。」

田の高さが均一になるように、厚さも決めた。「それは、規定されねんだ。向ごうさ田んぼあれば、向ごうの田んぼさ掛げる水のたがさをはがって、厚さもこれぐれだ。こうなって。四角なるものな。(7寸×7寸×7寸の正方形)。」

表土を脇に寄せ、サルケを採ったのちに土を戻す作業をおこなった。

乾燥・運搬・保管　掘り上げたサルケは１週間ほどかけて生乾きの状態にし、タヂを用いて２～３寸に３～４分割し、掘り上げた場所で更に乾燥させた。乾燥後にニオのように積み上げ、風通しのよい状態で、上面にはワラなどをかけ、保管した。「一旦な、土の……だげを（土だけを）採って脇さ置いで、それがらサルケを採るんだ。土を返して、そうやって田んぼさしたんだ。」「こう掘って、次さ上げるんだよ。それが生乾きにしたとぎ、タヂ持ってこれを狭ぐ切るもんだんだ。このままだば今度、はあ、崩れでしまう。なんも、それだっきゃ燃やされねんだで。そのおっきだのを、たげ１週間ぐらいかわげば、生乾ぎになるがら、それを、２寸なら２寸、三寸なら三寸に切って、乾がすんだ。してその乾がしたものが、×××（不明）なってがら、ニオみたいに積んで、冬まで置ぐわげだ。」「やあ、やはり大抵そう積んでるなあ。風通しいぐなるんだ。こうまるぐやって、風入ってこう、ヤネに藁とかなんだり付けだりな。そごの前のウヂだば、そういうおっきいニオこへであったけど、一般の家だばそうおっきいのそうこへることねね。」

用途　サルケは、暖房に利用したほか、炊事に利用した。木で焚いた飯のほうがおいしかったともいう。「サルケで焚いだ飯はカリョグがねえがらまぐねんだよな。流木でも、木で燃やした飯がめんだね。」

火の操作　火の操作にはコツがあり、木と組み合わせることで着火と火力の調整をおこなった。木は、枯れ木や浜から拾った流木を利用した。サルケの質は一様ではなかったため、経験を要した。「いやあ、それは経験だなあ。うまぐ燃すのは風通しだ。ハの字型にこうやって、風がな、いぐらが通るおんてねばだめだし、風が通るように、こやって。サルケは割るけども平らなもんだどごで、平らをつけねんで、角を立でるようにして。」「サルケだって、火力強えよ。あれは草の根だがら、なんなく木よなものもあれば火つぐように、だがら、それでも、薪焚ぐにも、サルケたぐにも、じょんずへだあってよ。たいしたじょんずに焚ぐ人もあった。木を乾がして火つけだのさサルケ上げでな。サルケもさまざまあるどごで、燃えねのもあるしな、燃えるのもあるしな、木を火つけでこさサルケやって、燃やしたんだ。」

その他　大曲のほかに、サルケを使っていた地域として、むつ市土手内地区がある。秋田の人が、利用を試みたが採算があわずにやめたという。「ドテウヂのほうはどうしてもこごよりサルケすぐねがら……すぐなかったけども、アギダがらその泥炭採るに来た人もあったな。それでサガンになってたんだ。（採算が）合わねでやめだよ、途中で。」「（大曲で商業的利用を考えた人はなかったが）ただドデウヂさ行げばな。秋田がら来た人でそれをデータンってそれを研究したふとがあったよ。ずっと前は。」

Ａ氏が物心ついたころにはサルケが使用されていたが、終戦後、戦地から帰還後は、あまり使用されなくなっていたという。(2015年5月5日取材)

② むつ市金曲　Ｂ氏　昭和４年生まれ　男性

居住の経緯　Ｂ氏の先祖は、大正時代に津軽地方から家庭の事情で大曲に入植した。「大正時代にこの辺さ入植したんだ。うぢのマゴジんども、大正時代にこさ来たらしんだ。相当遅ぐ来たんだよ。それでも。大正……10年ぐらいたづぐらい来たらしいんだけどもさ（以下略)。」

呼称　サルケ、またはデータンと呼んだ。「むがし使ったなあ。やっぱり、あの、データン！うん。サルケちゅうんだ。ああいうの。一名サルケサルケ、データンだげども、サルケサルケって言ってるわげだ。」

分布・質　山際から600～700メートルほどの範囲にサルケがあると認識している。「この辺にはねんだ。田んぼの、ずっと向ごうのほうの。あの山がら、600メーターぐらいあるがなあ。ずーっとあるわげさ。」「ヤヂッてさ、ムガシ川ながれであったのよ。川。せいぜい、５メーターが４メータぐらいの川。むごう、エンツウジ（円通寺）ってとごあるわげだ。あれまでずっとこう、川通ってさあ、その近辺が、ほとんどサルケなんだ。」

表面の土は耕土としてそれほどよいものではなかったと認識していた。むつ市内土手内地区のθ氏（事例㉝）はこのような表土をシクボと呼び、下層をサルケと区別して呼んでいたが、Ｂ氏も「表面の土もいぐねんだよ。あまり。

完全に真っ黒でもねんだよ。」というように、土質の差異を認識していた。

採取目的　「田んぼつぐるために、サルケ採ったわげだ。」というようにＢ氏は、サルケ採取の目的を、第一に田地を開発するためであり、二次的産物であるサルケは、薪に恵まれないこの地域にとって、燃料として不可欠なものでもあったと考えている。「採って、みなツヂ入れだどごで。その副産物として、火付けに持って来たわげだ。乾燥さへで。」「今だらこうやって木あるたて、この辺木一本もねんだもの。ムガシは。木あ、ねんだもの、全然。今木余ってるたって。ムガシあ木ねんだもの。」「ほとんと、マギつのはほとんとねんだもの。木。ま、炭あるだら炭買ってくるが。どにがしねば。」

使用年代　Ｂ氏が採掘の様子を見たのは、小学校低学年の頃だったが、小学校４～５年になるとあまり見なくなったという。Ｂ氏の年齢から考えると、昭和10年代後半頃にあたる。「うぢのマゴジさどが、うぢのチチオヤとか、掘ったのが、だいたい、みでるがらな。１回～２回みたんだ。（手伝ったことは）ねえだいな。小学校の入った頃だべなあ。２～３年ごろまでだべなあ。」

採取時期・場所　「時期は……春先だな。田んぼ起ごす前に」というように、田を耕起する前に採掘がおこなわれた。子どものころ、Ｂ氏自身がサルケの採掘を手伝うことはなかった。

採取量　一冬に必要なサルケの量は不明だが、200～300坪分を一度に採掘した。「一回に範囲広ぐ採れねどごで、１町歩も２町歩も採れねどごで、せいぜい採っても300坪が200坪、こういうシカグにして採るんだもの。」

採取の用具と方法　表土を取り除き、その下にあるサルケの層にタヂで切れ目を入れ、トガで採掘した。約30センチ×20センチ、厚さ６～７センチ程度の大きさに切り取った。「クワの広いクワでさ、だいたい、巾を20センチぐらいだばあるな。長方形のクワでもって、ずっと起ごして、乾燥さへで」採取するサルケの幅はトガの刃わたりに等しかった。「表面（の土）を取って、その下を採るわけだ。表面たって、10センチが15センチしかねえんだ。その下にサルケあるんだ。１段分とってさ。」（道具の名前は）「トガ」（唐鍬）と言った。「20センチ巾で長さ25センチ～30センチのトガだな。」「だいたい、そうだなあ、30センチぐれ。長さにしてさ。あど巾が20センチぐらい。厚さがさ、６センチが７センチ……まあ、決まってねえけどもな。だいたいその程度のアレでもって採ったもんだ。長方形のアレでもって。クワでもって。まず、ずっと、切れ目入れるんだ。切れ目入れで。ちょうどいいクワあるんだ。そのクワでもって、スッスど採るわげだ。」

乾燥・運搬・保管　採取したサルケはそのまま田に積み上げて乾燥させた。円形ではなく、正方形にレンガ積みをし、上部には雨よけを被せることはしなかった。秋頃に運搬し、小屋に保管した。「乾燥しねば、移動すに大変だべさ」とＢ氏が言うように、乾燥後に運搬すると重量が軽くて済むというメリットがあった。「煉瓦積みづのあってさ。間あげで。乾がした。田んぼさ行げばよ、みんなやってるの。あっちこちでやってそれあるわげさ。燃料にするために採ったらさ。円ぐ積む人はほとんどね。ただ四角にしてさ。互い違いになるようにしてさ。だいたい正方形みたいに積んでさ。上にはなも被せでね。雨降ってもなもだいじょぶ。乾燥せばすぐはごんできて、コヤみたいのさへでさ。」「（乾燥するまでの時間は）よほどかがったんでねがなあ。（乾燥させてから家に運んでくるのは）秋頃だど思うなあ。」

用途　サルケは炉で用いた。手製のドラム缶ストーブをしつらえ、採暖のほか、鍋をかけて炊事をした。ほかに、フロ焚きにも使用したという。「ご飯でも何でも、みなサルケでやった。ドラム缶みたいなのに穴あげで、鍋（手のついた鋳物の鍋）かげで。」「この辺、割合に米だば味は良がったよ。ご飯だげだば、そたらにまずいもので食べだごどね。おいしがったよ。」「風呂はうぢのエど、向がいにしか風呂ながったんだよ。（家にあったのは）木の風呂。風呂沸いだら、みんなさ教えでさ。はいにきたもんだんだ。とにかく燃やす物、木ねどごでさ（風呂にもサルケを使ったと思う）。木あねもんだどごでどもなねわげだ。（杉の林を指して）この杉もさ、ずっと遅ぐに植えだんだ。」

火の操作　Ｂ氏はドラム缶を用いて、手製のストーブを製作し、ヒボド（炉）で用いた（p. 141図７）。「（家に持っていって）ああいうドラム缶みたいのさ入れでさ、ま、ストーブだな。当時は。70年も80年も前だばそういうのはねんだもの。それで、どっからが見つけできてほらあ、作った。作って、燃やすの。イロリでも燃やす。燃やすよな。ヒボド。」「ムガシは細いドラム缶あったんだいな。100リッターのドラム缶てさ。軍で使ったのが。半分に切って。そごに鍋でもかげる。口はだいたい、適当にあ、やってさ。これさこう、穴あげで。ぼつぼつど。ガンガただいて、ただボヅボツど穴あげでさ。それでストーブつぐったもんだんだ。（くべ口は）四角に切ってろ。さまざまだ。それやってね人もあっただけどもさ。いや、ほとんと、ながなが作って使った人何人もねえだよねな。当時。」ドラム缶ストーブには、サルケを小割りにして積み上げて火をつけた。「（採取したときのサイズである20×30センチでは大きいので）割ってさ。盛り上げで火つけるのさ。」盛り上げる際のかたちは特になく、「ただどんどんどんどど」くべた。着火は容易であった。「火つぐよ。簡単に。乾燥せばものすごぐ燃えるもんだんだ。ほとんど、ドラム缶でやるんだ。ストーブ作って。ストーブのナガさ入れで。それでほら、燃したわげだ。」

煙・ニオイ　ドラム缶ストーブには煙突がついていないため、煙は屋内に立ちのぼった。「ニオイてばニオイすんだ

な。何のニオイって、煙のニオい。煙突ついでねんだもの。ほとんど煙突ねんだもの。」

販売・流通　サルケの売買や譲渡はなかった。「そういう人だばねな。（使うのは）自分のためにさ。」

その他　「ちょうど今86歳。86たって元気だものな。こうやってるもんだもの。いまハダゲやってさ。なもしごどねばどんどんまぐねどごでいま、こしてやって。」

③　むつ市金曲　Ｄ氏 昭和９年生まれ　男性　（およびその知人Ｃ氏）

居住の経緯　Ｄ氏の先祖は津軽地方、金木町（現五所川原市金木町）から移住したという。「マゴジが金木から、マゴバは嘉瀬。100年くらい前に。こちゃ来てな。」

呼称　サルケと呼んでいた。

分布や質の認識　Ｃ、Ｄ両氏ともに、４線から５線（Ｃ氏によれば「下水」のラインが200㍍ごとにありその呼称である）以降の区域で泥炭がよく採れると認識している。大曲地域へ南下すると、泥炭の分布が住宅地の近くにまで接近すると考えている。また、むつ市中心部の田名部の通称ヤヂマヂもサルケが深く堆積しているのだという。「サルケ採れる場所、ちょうどこごの苫生原（トマブハラ）の中間あだりだな」（Ｃ氏）。「４線がらだ。４線はまだツヂちょっとあるな。５線だな」（Ｄ氏）。「４線がら５線以降のほうがサルケが採れる。データンが採れる」（Ｄ氏）。「段々大曲のほうさ行げば深けんだよ。大曲のほうさ行げば、住宅の裏までとれるの。隣村（大曲）さ行げば」（Ｃ氏）。「田名部の町しゃべれば、ヤヂマヂ。あこあ深けんだ。あの、サルケ」（Ｄ氏）。

泥炭層は、２尺から深いところで10尺になると考えている。「我々すかりわがねども、むご（津軽地方）がら来た人だぢがやったんだど思うがら、ほぼ（津軽地方と）同じがと思うんだけども」（Ｃ氏）。「草の根の、アレしたもんだね。昔ここ田んぼ、水田に起ごして作ったもんで、土壌がねのなんぼも。あどみなサルケよ。ここで、浅せどごでもってだいたい、２シャグ、60センチだな。それがこんだ、まだ深ぐなんだね。それが大曲さ行げば、こんだ、10シャグもあるんでぇ。その下は砂。（表土は）こごでもって、だいたいねーどごで、10センチだな。あるどごで20センチ」（Ｄ氏）

採取の目的　田地の改良をおこなうためのサルケの除去が第一の目的であり、サルケはその副次的な産物であったと考えている。また、地域の一部の人がおこなっていたことであるという。「（サルケそのものは）重要視はさねもんだね。ただ、なーんのために採たてばな、みんず、田んぼにかがんねべ。それして下げるために、採たもんだね。それさあどがら今度あ、客土つものやったの。田、ツヂば改良すに。」「水田を低ぐするために、それでとたもんだどごで、一部しかやってねね。やるふとな」（Ｄ氏）。

採取の時期と場所　サルケの採取は秋におこなわれ、春までに積み上げたという。「秋に掘って、春までに、田うづまでに、積んでまるの。アギ。稲刈り終わればな。ツヂ、こう、わんつかずづ剥いで、タヂへで」（Ｄ氏）。

採取の量　採取の量は、１年につき２反歩ほどを採取した。また、その量は１年に必要な量を超えるものであった。このことは、採取の目的が燃料としてではなく田の改良にあることによる。「採るふとはいっしょけんめいな、だいたい一町歩とるな、何年もかがってよ。1年てばだいたい、やるてば、２ダンブがなんぼだべ」「（掘り採ったサルケは）余る。次々ほら、燃料つぐって、たいだもんだね。ニオイからだについでな。クサフて」（Ｄ氏）。

採取の用具と方法　タヂで縦横に切れ目を入れ、トガで30センチ四方、深さ（厚さ）15～20センチほど水平に切り取った。一列が済むと、二列目に移る。その際、二列目の表土を一列目の窪地にいれ、そこに二列目のサルケを更に置いていく。このままある程度乾燥させた。「平らに取るんだよ。水平に。20センチから、15センチぐらいだな。それ今度あ乾げばほら、10センチぐらいにすんだ。（巾は）ちょうど3センチぐらいが。さまざまだたってよ」（Ｄ氏）。「トガ刺さる分だがら、20センチぐらいでねが」（Ｃ氏）。「こう、タヂへべ。タデヨゴ（縦横）へべ。タヂへば、バッて同じ深さでおごすんだ」「（掘り採った土は）自然と戻っていぐのよ。自然と戻るってのはホラ、次々こう、返していぐので、ミゾでもってこっちゃ返すべ。こごはサルケねべ。そのサルケを採って、起ごすわげだ。ツヂ採ってな。まだ次はツヂおいで、まだ、採ったツヂの上さサルケこうやっていぐわげだ」（Ｄ氏）。採取の作業は、男性が中心であり、女性や子どもは運搬を手伝った。という。「オドゴオドゴ。オナゴだっきゃやねあね。（女性や子どもは）まず、積むだげだ」（Ｄ氏）。

乾燥・運搬・保管　採取したばかりのサルケのことをＣ、Ｄ両氏は「ナマ」と表現する[26)]。ナマのサルケはトガよりも多少大きいくらいのサイズであった。それを掘り採った列に隣接する列に（あるいは道路に）並べて乾かし（半乾き）、ある程度乾燥したのちに、間隔を開けながらレンガ積みにして、乾燥させた。隣家では互い違いにハイヅミにし、それを花弁のように五角形に配置していたという。各家庭それぞれの方法があった。完全に乾燥したサルケは縮まり、厚みが10センチ、幅は18センチほどになり、間隔をあけずに積み上げて保管した。これを「本積み」と称した。その後、家に運び、小屋に保管しながら使用した。「（前項のようにして掘り採った場所に置かれたサルケの列が）、乾燥してくれば、そさ積むの。わんつか。それこんだ、本乾き（ホンカワキ）してくれば、こんだ、持ってぐ

のさ。」「（掘り採ったサルケが）乾げば、こだ（今度あ）、盛るのよ。盛りこに。それまだ、乾燥せば、今度あおき盛りにすんだね。」「掘って、ずっと並べて。道路に。して今度あ、半分かわげば、こう、盛りに積んで置いて。穴開げでな。せば乾燥して。せば今度あ、乾燥してまれば今度あ、おっき盛りに貯めでおいで、今度あウヂさもてきて、焚ぐの。」「乾燥してまれば、締まるしてな。10センチが……」（D氏）。「これが寸法ぐれでねべがなあ（と示す）」（C氏）。「それの半分だ」（D氏）。「この半分が？ナマで？」（C氏）。「生は……そう厚ぐ採らねえな。まあ、ちょっと、それがら下がるな。３センチぐらい下がるな。巾はアレだ、このくれ（約18㎝）だ。これこんだ、田んぼで半乾ぎにせばこんだ、盛りコにするよ。してまだ乾燥させで、ホントに乾げば今度あ、本積み。ビヂビヂに積むわげだ。」「それを囲いして、そから持ってきて、家にも配って、コヤに入れて、それこんだ焚ぐわげだ。」（D氏）。

用途　イロリで、暖房と炊事に利用した。火力は強くなかったが、炊飯もおこなった。「イロリさよ、ストブでぎるまえに、盛りにして焚いだだ。どんど、盛るのさ。して、積んで燃したの。（大きさは）ちゃっけぐして。傍さ置いでな。手でばりやたべたてな。」「暖房に使ったのお。煮炊き……」「（火力は）あまり強ぐねんだいな。ゆっくりだ。強いあれでね、もやもやど燃えるしてな。ボーボどいぎおい強くったら、風吹いでやねばせ。すぐ燃えでまるして」（D氏）。「いや、ナベだがら、デンキガマよりはおいしい。いや、なんもねえ時期だがら、おいしいのさ」（C氏）。

また、D氏は、ここ金曲地区では、サルケを利用したのは田を改良する必要のある家であり、集落の中では少なく、むしろ秋に海岸から拾って来た流木が利用されたと考えている。「その頃こごでよ、木焚ぐ木がねえんだね。ねえの。で、こごのほら、海岸あぁべ。あの枝ひろってきて焚いだもんだね。みな冬なればアギなればてょーさいて。（そこに行って）」「木の枝とってきてな。今の、あら、浜の木あべ。あれ。あれあ、コーギヤシ木だが。あれの枝ほら、アギになれば、枯れだのば、ひぱて、折ってよ。で、もってく（来）て、焚いだもんだんだね。」「サルケだばあ、まず零点何パーセントだな。ま、こごのブラグでたいでも、２～３軒だ。」「いや、（流木とサルケは）一緒には焚がね。特別サルケを特殊的に焚いだんでねえ。その、水田を低ぐするために、それでとたもんだどごで、一部しかやってねね。やるふとな。」「まず、こご（金曲）でもとたフトでも２～３人だで」（D氏）。

火の操作　D氏によれば、昭和20年頃にサルケ用にドラム缶を利用した手製のストーブが製作されたという。D氏「ワーどだいたい、アレだ、小学校…３～４年の時だな。ドラム缶半分に切ってよ。」

煙・臭気・灰　両氏からニオイについての発言が繰り返しなされた。燻製のような独特のニオイがしたという。ドラム缶ストーブの使用によって、ニオイは抑えることができたという。「なも、乾燥したものはニオイねたてよ。焚げばニオイすだねな。くせえニオイすんだ。」「ワ、燃したことねたってよ。掘って、見だんだね。隣近所でもって、掘って、薪にしたの。マギに。してニオイほら。特殊なニオイすんだ。」「ニオイしてな。燃やせば。くせんだね。」「始め、ただ焚いだのよ。それこんだ、ドラム缶て、ストーブに作って。それさズッパどへで。焚いだの。へばニオイ今度あなぐなる。でもまだニオイつぐんでぁ。体さ。焦げくせえニオイ。あー、来ればわがんだ。あー、サルケ焚いでら人くればな。煙しみるんだよ。なんていうがな、クセえ、あの、煙のニオイ」（D氏）。「昔、（それを焚いている家に）遊びに行ったもんだね。ニオイはするけども、薫製みたいなニオイ。でも何も差別みたいなことは（なかった）」（C氏）。

サルケを燃やした灰は、肥料や消雪材として利用された。「慣れればだももようで、アグてが、灰、それ溜めれば、盛りにして、灰ば今度あハダゲさ使べし、……。カリにして。撒いだりして、ユギ消しにしたり。……あどはねいなあ。」「まだアグほら、堆肥になるんだこんだあ。ポサポサポサポサってな」（D氏）。

灰から発火することがあるため、取り扱いには注意を要した。灰を入れたカマスが発火し、あやうく火事になりかけたこともあった。「おかねんだそのアグあ。ヘダにほかせば。火事のもどになるんだ。しっかりける（消える）までなげでおがねば」（D氏）。「燃えるがらな」（C氏）。「ワの家さなも焚がねて言うけども、ワの実家焚いだごどあるだばてろ、（おそらく）焚いだべせ。ていうのはそのアグとったもの。カマスさへで、おいだだべおん。ところがまだ火が、火種があってたんだわげな。いやいや、その、火事起ごすどご（した）。おかねもんだね」（D氏）。

（2015年5月6日取材）

④　むつ市大曲　E氏　大正15年生まれ　女性

居住の経緯　先祖は津軽地方から入植した。E家に嫁いだのは昭和19年である。地主が手放した田を購入して稲作をおこない、笹藪を切り拓いて畑作をおこなったが、実りが悪かった。子育てにも追われ、大変な苦労があった。「地主が、子どもないふとでったがら、育でだ子どもが上北さ行ぐってね。それでその子どもさかだってぐにこの田んぼいらないわげだ。それでうちさ今度あこれ９反歩、売ったわげだ。うぢのおじぃちゃん喜ごんで喜ごんで。イヂ枚もないんだもの。津軽がら来て、田んぼイヂ枚もないでしょ。だがら、喜ごんでしまって、さっそぐ買ったの。そして、むがしナシロっていうものつがねば、苗っこまがれね。その苗っこまいで、そして、なんとか生活して、暮らしたわげ。」「そしてこご笹藪。笹にかって笹にかっての。たんだつぐらいねんだもの。そしてモノ植えればボフボフボフ

っての。モノあがんねの。それ水掛げだって、何もへっちゃらさ。だがら、何年もはだげつぐってで、はだげがらモノ穫ったごどね。笹藪だば。ボフボフって。それで、ま、苦労した。苦労して、苦労して、この年なった。朝５時ってば田植えに行ぐんだよ、ワシ。子ども投げで、やあ、今日どうしてだんだべな。っと思うの。そう思っても、カネねば、やっぱり歩ぐ。そして、５時ってば行がねば間に合わねの。わ、自転車乗れね人だね。むがし自転車どごの話だが、食べるのもやっとだもの。自転車ダノってだも買ってけるふとね。ウヂでもまだ津軽がら来た母親がチヂオヤ早ぐ死んで子ども６人あって、ワがいぢばん末っ子で６人あったの。そして、チヂオヤはやーぐ亡ぐなったの。自分で、もげねばねもげねばねて、ただただはだらいで、そしての。」

呼称　サルケと呼んだ。「サルケ、『ル』だ。」

分布・質　表面にある「ツヂ」を掘り採ると、下にサルケがあると認識していた。また、サルケには質の差異があることを認識していた。堅いサルケが良いサルケであった。そのメリットは固形燃料として形を保持しやすいという点にあった。「ウヂのおじちゃそのサルケ掘って、ツヂ一回取ねぇまねわげ。ツヂ掘って、その下が、サルケだの。」「そして乾燥したのばウチさ持ってくるし、そのサルケによってピンとかでのもある。やわいのもある。ゴジャゴジャドやわいのもある。かだいほういい。しごど（仕事）しやす。やわいの、たなても割れだり、こぼれだり、こうなんぼじょんずにたなたどおもてもの。そごだのさ。」

同集落に暮らす姉の家の田では、サルケの層の下に、埋没樹木があったという。ノコギリで挽いたとの証言が聞かれたが、利用については明らかでない。「サルケの下にこったら木ばり、ゴロンゴロど。海でったってへるして、ホントだごった。木あってったって。ほてオラ、たげ年いってがらでも、こたらだおきい木の。ながまさてるんだ。それ今度ノゴブギして、採って。うぢの田んぼながった。ウヂの姉いつもへる。まあまあ、田んぼの下にこったらだ大きい木ばりあって。持でねど。ほれ、水くてしまって。重ふて。」

採取の時期・場所　春先に田から採取した。「春早ぐ。田植えもしねえ、田んぼも打だない前に採るの。たとで１めえでも、1反歩でも、採るわげ。ツヂ掘ってでしょ。」

採取の主体　サルケ自体を採取するのは男性だった。「重いから」だという。表土を剥ぐ作業は、女性もおこなった。夫がサルケを掘り、その後弁当を持って子どもとともに駆けつけたＥ氏が、サルケを掘り採る場所の表土を剥ぐ作業をした。子どもの時にはそのような作業を手伝ったことはなかったが、母親はこういった作業に従事していたという。「掘るのは男の人。モッコたなぎ。縄で編んだ、モッコ。あれでたないで。ワイだあタナグやぐだな。おじちゃあ、掘る人だして。ワア子どもどば、弁当詰で水詰でだよ、オシメたなて、リヤカさ乗へで、行ぐわげ。へばその頃におじちゃ割るの割って、かだづげるのかだづげで、へばワ田んぼさ行げば、ツヂ掘り。ツヂ掘って投げねばねがら。そしねばサルケ掘らいねがら。きれいに採るわげ。」「ハア、サんどたなげねえ（もの）。ふかぐ掘るがら。」「（結婚前にはサルケを）掘ね。えの母親だば堀ったたて、（私は）まだ小さふての。掘らへられねんだど。姉様（大正４年生）だば、みったどそいうこどしたど。」

採取の目的　採取の目的は、第一に、田を低くするためであった。高い田は水を保持することができず、「ジャル」（笊）のようだったという。そのために、サルケを一尺以上掘り採り、低くした。田がぬかるんで大変だったこと、子どもをお腹に抱えたままで田の草取りをして非常に苦労したことなどが、サルケを掘りとの関連のなかで語られた。「他所の田っこひぐふて、ワシらずっと遅ぐに買ったんだ、田んぼ。ワシら夫婦２人だがら、借りるわげ。ワシら起ごしてみんずかげだでしょ。さあ、そのひがおっきぐなっておっきぐなって、田の草に、わぁまだ３０ニチ暮らさねうぢに、６月に産んだ子どもいぢばんおっきいのさ、そしたら、ウヂのおじいちゃんの弟、義理の弟になっていて、本当の兄弟でないわげだ。その弟がてづだいに来て、おばちゃあ、あの、アレだよ。そんとぎ、かっちゃあ、かっちゃあって呼んでだけども。お産したどぎ早ぐはだらげば、一生それが悔いのごるど。だがら、入（はい）ないほうがいいんだがら、ワシてづだいするがら、田の草だって、でも、ウヂのおぢぃちゃんは、とにがく人に負げたぐないがら、おばちゃも行がねばだめだ。お産もなもあったもんでね。ニジュウログにぢだがなんぼが暮らしてった。したきゃはあ、ニジュウログにぢに連れで行って、田の草採り。投げでおいだ田んぼだがら、ぬがってぬがって、馬はれば。えのおじちゃたがいどごで水かがねでしょ。高いば。ひぐいどごだば足ぬがねでは。田んぼたがいがら、馬入れでさ。なんぼが低ぐしたの。サルケだがら、なぼでもぬがってぐの。馬が大変でったのさ。それでもしかだねはあ、ほれ。頼んで来て。いぢにぢナンボナンボだんだよ。低ぐするために。水かがんないがら。よその田、こうたがいば、（うちの田は）こうひぐいべ。ウヂのおじちゃイッシャグなんぼ採ったんだょ。あまりこぅたがふて。水全然ワシらかげにぃっても。ま、とにかぐ、一生懸命この田んぼ起ごしてしまって、水かげるようにしたんですよ。」「たがいどごで水全然かがんねの。朝はやーぐ水かげにいてきての。エさ戻ればハア、ねの。じゃる（笊）。じゃる。そのためにこご堀ったわげ。」

サルケを掘り採る作業は重労働であったが、Ｅ氏の夫は働き者で、酒も煙草ものまず、ひたすら働いた。「１尺ぐらい採んだ。それこんだこれずっとひぐぐなるわけだ。そして、サルケ採ったどごばり、水かがるわげだ。ウヂのお